ISSN 0388-4732

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第27巻　第4号

川上御前社

越前禅定道は、平泉寺白山神社から小原峠を越え三ッ谷を通り市ノ瀬へと続きます。現在、三ッ谷を通る道は廃道となっていますが、この信仰の道沿いに、祠（ほこら）が建てられている場所があります。

祠は三ッ谷の奥、西俣谷川に面した場所に位置する川上御前社（かわかみごぜんしゃ）です。白山開山の祖と伝えられる泰澄大師が、山頂で拝顔した女神像を、帰路の途中に自身で彫り、この地に奉ったとされています。

現在の祠は、かつてこの地に住んでいた三ッ谷集落の人々により結成された川上御前保存会により、1988年に再建されたものです。豪雪にも耐えうるよう銅製の頑丈な造りになっています。中には、新たにご神体として製作された唐風の、ふくよかな顔の木製女神像（もともとの女神像は平泉寺白山神社に所蔵）と石仏2体が安置されています。

訪れる人も少ない山中にひっそりとたたずむその祠には、離村した三ッ谷住民の心のきずなと白山信仰への強い思いをうかがい知ることができます。

（小川　弘司）

金沢市にも現れたニホンザルの群れ

上馬　康生

石川県でニホンザルといえば、長い間、白山の中宮温泉周辺の群れが有名でした。しかし、1995年から餌付けをやめて、人前に現れるニホンザルは山へ追い返すという方針で対応するようになり、以前に比べると目に付きにくくなってきました。この方針は、石川県と吉野谷村、中宮温泉旅館組合の三者で協議した結果のことでした。ところが当時、すでに白山ろくの集落周辺で、中宮温泉付近にいる群れとは別の群れが、野菜などに被害を与え、そのことが一般に知れわたるようになっていました。

犀川上流で起きたサル被害

1996年の秋の終わり、金沢市の犀川上流で起きたサル被害は、近年では初めてのもので、おそらく、少なくとも70年以上（大正時代以来）なかった犀川水系でのサル騒動でした。場所は犀川ダムの下流約6㎞に位置する標高200m前後の熊走町で、突然ニホンザルの群れが出現し、数日間現れて、畑に残されたダイコンに被害を出し、カキの実を食べていきました。その数は20から40頭数えられたといいます。畑のダイコンへの被害を写した写真が、地元紙に大きく報道されたので、記憶に残っている方もいることと思います。

この年は、白山ろくでも秋の早くから、各地で被害が続出しました。ブナをはじめとする山の木の実が特に不作の年であったことが原因であると考えられました。

犀川水系のサル騒動は、この年突然起こり、またその後は何もなかったかのごとく今日まで起こっていません。

ニホンザルはどこからきたのだろう

ニホンザルの被害はその後なかったものの、これを機に調査に入った滝澤　均さん（現いしかわ動物園）らの調査では、同年12月に犀川ダムの下流、すなわち被害のあった熊走町と犀川ダムとの間の、車道上や山の斜面に、ニホンザルの糞や足跡、食痕が見つかり、そしてついには姿が確認されました。1998年2月には、42頭の群れを発見し、オトナオス10頭、オトナメス9頭、6歳1頭、5歳3頭、4歳1頭、3歳4頭、2歳5頭、1歳7頭、アカンボウ2頭と、群の構成内容が明らかになりました。滝澤さんらはこれを、付近の挙原山の名を取りアゲハラ群と名付けました。そして、筆者らが高三郎山で1981年5月に発見し、後にタカサブロウ群と名付けられたニホンザルの群れとこの群れは関連があるのではないかと考えています。どういうことかというと、夏に高三郎山にいる群れが、冬にその下流域の犀川ダムの下に現れて、そこを冬の生活場所としていると考えるこ

高三郎山（クラコシ尾根　標高1,000m付近よりトダニ左岸を望む　No.12の記録場所）

とができるのです。白山ろくでは、数がしだいに増え、群れが分裂して群れの数も増え、少しずつ下流域に分布を広げていることが明らかになっていますが、犀川水系でも、同じことが起こっているのではないかと思われるのです。

高三郎山周辺は、犀川の源流にあたりますが、地形が急峻で、やぶが茂り登山道も十分ではなく、5月頃の登山と山菜取りを目的に一部の人が入山するほかは、一年を通じて人の出入りは限られています。特に冬期はまったくといっていいくらい人の入れない地域で、ニホンザルのことを調べるとなると非常に難しい場所なのです。

犀川水系周辺のサルの記録

私は、学生時代の1970年代初めから、この山域に鳥類調査、登山等で何度も入山して、ニホンザルを目撃したり、その糞を記録してきました。また、1990年から1994年にかけては、ニホンザルの調査を目的に入山し、糞や食痕等を記録しました。ここではその他に、登山者などから情報を得たものを含め、今までの記録を整理してみました。

表　犀川水系及びその周辺のニホンザルの記録

番号	年月日	場　　所	標高 m	数	内　　容
№1*	1971年	成ヶ峰、二又川	―	数頭	登山者からの聞き取り
№2*	1971年頃	成ヶ峰から口三方岳付近	―	群れ	旧倉谷町住民から聞き取り（サルクラの滝付近に群れ）
№3	1973年 8月22日	高三郎山、クラコシ尾根	930		糞
№4	1974年 8月17日	高三郎山、シャクナゲ尾根	840	群れ	標高840m～940mに糞4か所
№5	1976年 5月28日	高三郎山、クラコシ尾根	1,020	群れ	トダニ側から複数の叫び声
№6	1976年 6月16日	高三郎山、クラコシ尾根	1,000		トダニ側から叫び声
№7	1976年 8月12日	高三郎山、クラコシ尾根	920	群れ	標高920mで木から飛び降りるニホンザル目撃。標高920m～1,000mに新しい糞9か所
№8*	1977年10月 8日	犀川ダム上流、二又川出合	350	2	オトナ2頭を目撃
№9*	1980年 3月19日	高尾山	800	群れ	標高800m～840mにかけて群れ(約5頭分)の足跡
№10*	1981年 3月 8日	高尾山	800	群れ	標高800m～840mにかけて群れ(約5頭分)の足跡
№11*	1981年12月18日	高尾山	700	2	足跡（2頭分）
№12	1981年 5月20日	高三郎山、トダニ	1,000	9	観察者に気づき、クラコシ尾根からトダニへ下り、トダニ左岸へ逃げる。少なくとも9頭目撃
№13*	1983年 4月13日	医王山、奥新保町地内	410	5	オトナ4頭、こども1頭を目撃。他にも同年3月1日、9日に雪の上に足跡（標高250～430m）
№14	1986年 3月13日	医王山、奥新保町地内	250		カラスザンショウに新しい食痕
№15*	1990年12月 8日	口三方岳	550	10	標高550m～600m付近で、少なくとも10頭目撃
№16	1991年 4月26日	荒倉峰	570		古い糞（繊維質、冬期のもの）1個
№17	1992年 6月10日	奥三方山～奈良岳	1,460	群れ	標高1,550m、1,620mにも、新しい糞と新しい食痕（ウド）
№18	1992年 6月10日	奈良岳～大笠山	1,550		新しい糞
№19	1992年 6月11日	奈良岳～見越山	1,590	1	オトナ1頭が富山県側から石川県側（二又川源流）へ逃げるように走るのを目撃。1,520mに新しい糞
№20*	1992年秋	犀川ダム付近	350	1	首に黒いベルトをしたニホンザル（発信器をつけたダンディと名付けられたニホンザルと推定）が、ダム職員により発見される。
№21	1993年 6月27日	犀滝上流の二又川源流	1,250		シシウド、オニシモツケに新しい食痕。1,400mにも食痕
№22	1993年 6月27日	奥三方山～奈良岳	1,500		3か所に新しい糞
№23*	1993年 7月 4日	内尾谷	1,100		シシウドに新しい食痕。1,200mにも食痕
№24	1996年 5月11日	高三郎山	740	群れ	ナガ尾根の標高740m～870mに新しい糞、連続5か所以上
№25*	1996年12月初旬	熊走町	190	40	集落付近に20～40頭の群れ。大根、柿の食害.
№26*	1996年12月31日	犀川ダム下流	270		古い大きな糞
№27*	1997年 6月22日	大笠山	1,550	群れ	大畠谷の上流斜面に3頭目撃。フカバラノオの登山道の標高1,550m～1,780mに新しい糞5～6か所。同じ付近で別の登山者が、木の上に大きな動物を何度か見ている。
№28*	1998年 2月 8日	犀川ダム下流	250	群れ	足跡、食痕
№29*	1998年 2月11日	犀川ダム下流	300	42	挙原山北北西斜面の標高350m～500mに群れ目撃。同付近で、2月14日～15日に群れ追跡、群の構成判明（アゲハラ群）。

*筆者以外からの情報

犀川の源流域は、標高1,644mの奈良岳を最高に、標高約1,000m前後から約1,600mの山々が連なり、石川・富山県境をなしています。地形は全般に急峻で、深く切れ込んだ谷が数多く入り込んでいます。冬期の降雪量は非常に多く、その雪が6～7月頃まで谷の中に残っています。植生は、ブナ林や低木林、高茎草原、ササ草原が主要なもので、標高の高いところには、一部ダケカンバやオオシラビソなど亜高山帯の植生もあります。

1971年から1998年までで、表のように29件の記録が得られました。ここにあげたのは、犀川水系だけでなく、周辺のものも含めました。ただし、白山地域のニホンザルとして、すでに明らかとなっているものについては除いてあります。一部推定を含め場所を示すと図のようになります。

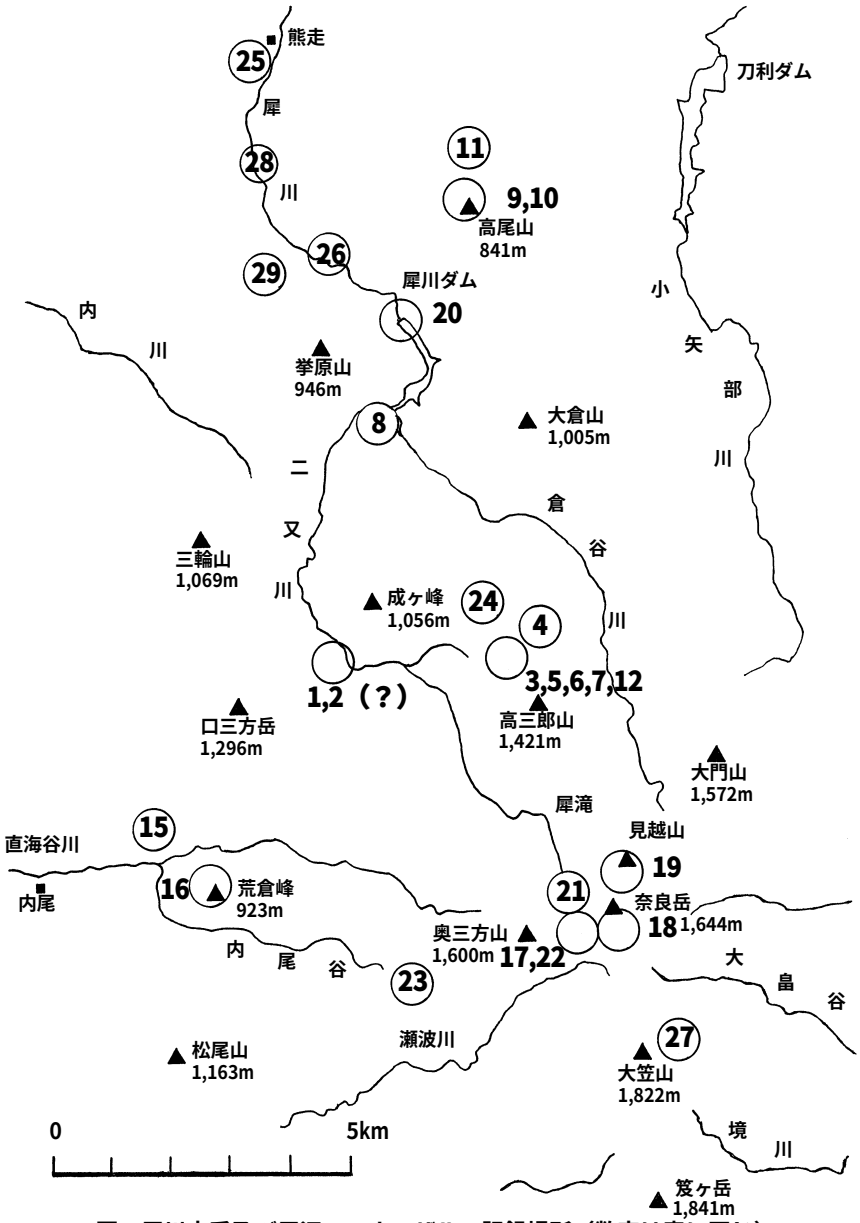


図　犀川水系及び周辺のニホンザルの記録場所（数字は表に同じ）

タカサブロウ群

この中で№3～7、12は記録場所および年代から同じ群れのものと考えられます。高三郎山の山頂北西部に当たり、標高1,000m前後のところです。これらはすべて、5月下旬から8月下旬に記録されていることから、この群れは、この付近を夏期の生息場所としていると考えられます。タカサブロウ群とされた群れです。なお、№24も、年代は違うものの場所的に同じ群れの可能性が高いと考えられます。

高三郎山に残されたニホンザルの糞
（1976年8月12日撮影）

谷には遅くまで雪が残る（犀滝の上流）

高尾山・医王山の冬期の群れ

№9～11は、3シーズンにわたって、高尾山の尾根筋と付近の斜面の同じところに、冬期にみられているのが特徴です。同じ群れの可能性があります。季節的なものか、周年の生息場所かは分かりません。図には表せませんでしたが№13と14も、小群ではあるものの場所的に近く、同じ群れの可能性があります。今回の記録の中では最も北に位置し、医王山の北部の谷の中です。これも、3～4月の初めの記録であり、季節的な生息地かもしれません。これら2つの小群とみられる群れの、夏期の生息場所がどこであるか興味が持たれるところですが、その後の情報はありません。

ナラダケ群

次に、№17、19、21、22は同じ群れである可能性が大きいと思われます。犀川の本流である二又川の源流部に当たり、残雪で埋まった谷の中の、標高1,250m、1,400m、1,620mの斜面の高茎草原に生えているシシウドやオニシモツケ、ウドなどの若草に食痕がありました。また二又川の最源流部に当たる尾根でオトナザルを目撃したり、新しい糞を数か所で確認しています。記録年代は違いますが、タカサブロウ群とは場所的に離れており、また前記のように、タカサブロウ群は高三郎山の山頂北西部付近に夏期に連続して生息していると考えられることから、別の群れと考えたほうがよさそうです。ここでは付近での最高峰奈良岳にちなんでナラダケ群と名付けることにしたいと思います。№18もこれらと近いことから、同じ群れの可能性があります。

犀川の本流である二又川の源流部

大笠山の群れ

奈良岳～大笠山の東側斜面

№27の記録は、1997年6月22日午前11時頃、大笠山山頂北東の斜面で、大畠谷源流部にあたる斜面の雪渓上を移動するニホンザルが3頭発見されたものです。富山県上平村境川ダムから大笠山への登山道の、標高1,550mの位置の北方400～500m離れたところにあたります。また目撃者によると、標高1,550～1,800m付近の登山道上で、人の親指大の太さで長さ7cmくらいの暗緑色の新しい糞が、5～6か所に連続してあったとのことです。糞はどういう訳か、すべて登山道に対して垂直に並んでいたのが不思議であったと報告されています。また、この目撃者は、同じ場所で別のグループの登山者が、木から飛び降りる複数の生き物を見てクマと思って、恐ろしくなって下山したことを聞いています。これらは、いずれもニホンザルの情報と考えられ、付近にかなりの数がいる群れがいたと考えられます。なお、富山県の白山地域（平村、上平村）では、富山県のニホンザル研究者の赤座久明さんによると近年ニホンザルの群れの情報はなく、少なくとも昭和初期以降初めての群れの記録となります。しかし、夏期、冬期を通じて標高の低い境川流域等での群れの情報はないようで、発見場所が石川県境に近いこともあり、この群れは石川県側から行動域をのばしている可能性が高いと私は考えています。場所的には雄谷の群れの一つとも考えられますが、前記ナラダケ群あるいは、これら2つとは別の群れの可能性もあります。

アゲハラ群

№25、26、28、29は同じ群れであると考えられ、滝澤さんらがアゲハラ群と名付けた群れです。この群れの夏期の生活場所が、上流域の二又川や倉谷川沿いにあることが推定できますが、今のところでは、タカサブロウ群などとの関係、さらにはこの地域に何群いるのかなどは明らかでありません。

その他の群れ

№15については、12月の目撃情報であり、付近に群れの冬期の生息地がある可能性が高いと考えられます。№2との関係などは不明ですが、別の群れの可能性もあります。位置的に、また時期的にタカサブロウ群とは別の群れと考えた方がよいでしょう。河内村内尾の集落に近いことから、今後集落近くに出現する可能性があり、注意していく必要があります。

№23は年、時期ともにナラダケ群と同じであり、もし、№23が群れであるとすると、ナラダケ群とは離れていることから別の群れの可能性が高いと思われます。場所的には、瀬波川の群れのいずれかの可能性も考えることができます。しかし、瀬波川にいるとされる、クロダニA群、B群、ガラダニ群などのうち、特に上流域にいるガラダニ群の夏の行動域はまったく不明ですので、はっきりしたことは分かりません。

今号では、犀川水系周辺のニホンザルの記録についてまとめたものを紹介しました。次号では、これらの記録から季節と標高との関係や群れの今後について述べる予定です。

＜石川県白山自然保護センター＞

笈ヶ岳紀行

田中　稔

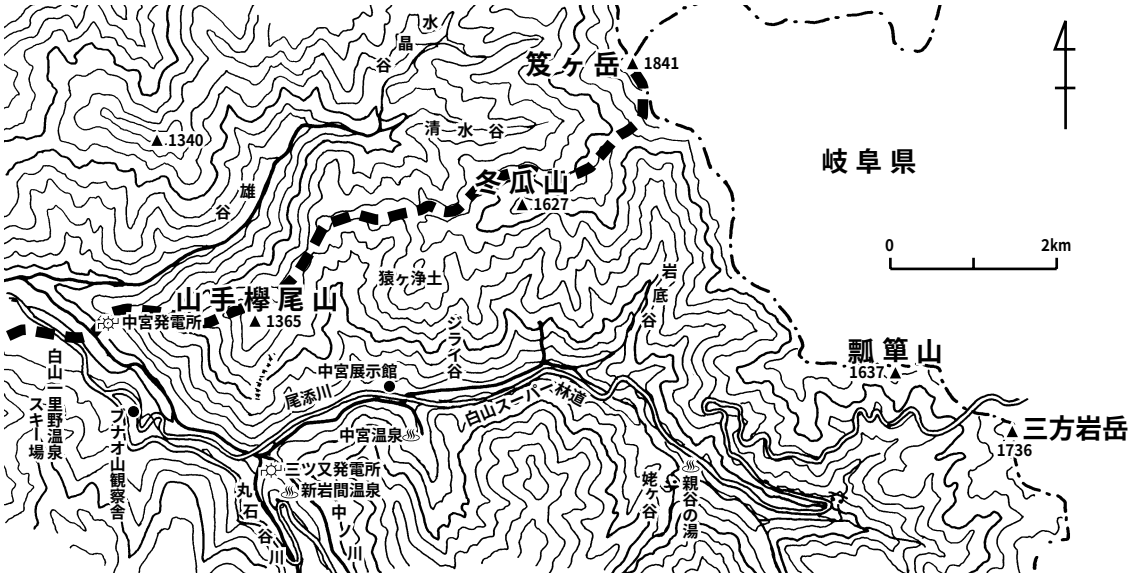
高倉山頂からの笈ヶ岳（1997.2.28）

とりあえず山行きと決めて家を出た時の柱時計は、8時半を廻っていた。5月6日、ブナオ山の尾根筋に私も風景の人となっていた。

日本中が動き回ったゴールデンウィークは、田植えと勤務が重なり、行楽は無縁のものとあきらめ続けてきた半世紀だった。5月6日からの私の3連休、家族に天気がよかったら山へ行くという予告はしていた。登山靴、ザック、テントはひそかに手入れをしておいた。行き先は笈ヶ岳。残雪期の4月から5月の上旬までが石川県側よりの笈ヶ岳入山シーズンとなっている。笈ヶ岳には登山道は無いが、早春の3月に入ると、勤めている白山自然保護センターブナオ山観察舎には、笈ヶ岳に登りたい人達が中京、関西、関東から偵察に訪れる。中宮発電所貯水池より冬瓜山をめざし、ブナオ山尾根のルートをとるパーティーや、ジライ谷から猿ヶ浄土をつめて登る人たちもいる。今春のゴールデンウィークには百人を越える岳人がテントを張り、なかには日帰りの猛者もいた様子を聞いていた。今冬の白山北部での大雪は50年ぶりとも云われ、中宮温泉や白山自然保護センター中宮展示館では表層雪崩の大被害を受けた。この残雪の異常が笈ヶ岳入山を思いたたせた。白山ろく白峰地区や中宮地区の出作り育ちの人々ほど深山にとけこんでくらしていたわけではないが、「わらじ」や「あしなか」履きで裏山の杉葉ひろい、朝食前の馬草刈りなど少年期、青年期に山村生活の体験はしてきた。このような山育ちの私は、ヤブこぎに自信みたいなものは無論もってはいる。しかし、笈ヶ岳のヤブでの体力の消耗は口筆に出来ないぐらいのものであろう。30歳も若かったら多分ヤブの入山も試みたと思うが、今ではそこまでの体力はない。大雪で春が遅い事が幸いして老いの笈ヶ岳登山を果たさせて貰った。

天気図では北陸地方は3日間雨の予報はなく、日中の気温も15℃前後に安定している。ブナオ山中腹では早春を告げるカタクリ、キクザキイチゲ、キジムシロ等が咲きはじめていた。昨年、ここの観察会でギフチョウを見たが、今日は逢えなかった。番（つがい）のカケスが鮮やかな羽根を見せて飛び、程なく雄谷上空にイヌワシが舞う。ブナオの背を越え、雪一面の世界に入る。ここから愛用のグリベルモント（ピッケル）の助けを借りて歩く。標高1,400m、尾根からは大笠山、宝剣、錫杖、笈ヶ岳がくっきりと目の前に姿を見せてくれる。右手反対側では真白な白山主峰が雄々しくにらみをきかし、老いぼれ行人に門前払いの金剛杖を振り降ろした格好で立ちはだかっているようだ。単独行にふっと不安がよぎる。5年前関西の登山者が笈ヶ岳登山を断念し、独り、パーティーから離れて下山したが、ブナオ山ズバイ壁に転落死した時の事が重なってくる。

静かな世界である。そして静か。山の生きものはイヌワシが去った後、聞こえるのはブナ林の大木にヤドリギのかたまりの一つが雪に傷を受けたのだろうか、風がゆするかすかな音と、遠くでアカゲラであろうドラミングの音が低くノックするばかりだ。



山毛欅尾山・笈ヶ岳の位置図

雄谷清水谷と蛇谷岩底谷に一気に迫る雪渓、雪庇の深さをさぐりながら一歩一歩進む。雪上の登山の緊張感は雪の寒気と融け合って、何ともいえない楽しい気分にしてくれる。ニホンザルの一群の移動行動の観察を終え、白山主峰に目を移せば、空がうすくアカネ色を帯びて来る。そうだ、テントの用意を。風景の酔いから現実の自分を取り戻す。冬瓜山と後高山の中間尾根の適当な支え柱になる5、6本の木にテントを覆う。床はチシマザサや広葉樹の落葉を防寒とクッションにする。明日までの俄か寝所の設営終了である。

夜更けより尾根風と氷点下の寒気に悩まされる。体温が失われそうでテントの中でほとんど横になっていられない。ストレッチとマッサージをくり返す。くり返しを止めると身体全体に震えが止まらない。悪寒が走るというのはこの現象なのだろうか。全力で下肢部をマサツする度に明るい火花が散り、笹の枯葉をこがす経験をする。どうにか携帯のガスコンロの炎で寒さをしのぐ。

翌5月7日午前2時、悩まされ続けた尾根風がピタリと止んで、それからの意識が無い。寝覚めの明かりで時計の針を外に出て確かめると5時5分を指していた。3時間は眠った訳だが時計の針の回り方が変な気もする。朝焼けの白山と笈ヶ岳にシャッターを切り感謝の合掌、そして精一杯の深呼吸、愛すべき一日のはじまりだ。朝食には雪渓を溶かしていれた一杯の煎茶とコッヘルでつくったカユ。この朝食の美味に、口筆にしがたい幸福感にひたる。テントより出て驚いた。昨日の靴跡が凍り付き、アイゼン無しで歩けない。一晩での変貌に緊張感を覚える。残雪とは云え小笈の雪屁の積雪は6mはありそうだ。

テント設営地点より白山

テント設営地点より笈ヶ岳

9時30分、笈ヶ岳のピークに立つ。大笠と白山主峰にカメラを向け、遠く北アルプスの山並を望むも、うすくガスの状態だった。煮干しとバナナに草餅のおやつと小休止。午前10時、帰りの靴ひもを締めなおし小笈へと下る。ピッケルと歩巾のピッチが程良いリズムで雪面の固さにマッチし心地よく下山を開始する。後高の尾根にさしかかるとヘリが1機低空で、なんと笈ヶ岳・仙人窟に飛んで来て遭難救助の体制をとっている。後で解ったことだが石川県警の救助ヘリであった。拡声器の声ははっきりしない。ヘリを無視して下山を続ける。冬瓜山より少し下ったカムリ平中間コースの取付点、1人の登山者がルートをさがしているのに気付き声をかける。彼は6日帰宅の予定だったが沢に迷い込み、上空のヘリは捜索に来たのだと云う。2人連れで1人は相当バテているが大丈夫なので自分が先に下山して無事を知らせに行くところだと云う。若く元気な足どりだし、まあこちらからは詮索しまい。以後、ブナオ山まで同行の下山となる。往路と復路の遠望感覚に相違があることや、体力を保持するためのペースなどを思いつつ降りる。

笈ヶ岳山頂

残雪の尾根歩きでは、雪渓をピックでけずりポケットのアメ玉や氷砂糖での即席カキ氷が欠かせない。アメ玉一個が口の中で何回もカキ氷を提供してくれるのでありがたい。また、煮干しをばりばりかむのもいい。

家族をどうやって説得するかが今回の山行にあたっての難事であった。今回は運良く笈ヶ岳行きの機会に恵まれた。春先、ブナオ山観察舎や中宮展示館を訪れる山好きの人たちとは、笈ヶ岳の品格と魅力に地形模型を囲んで話が弾んだ。登山路のない不便さも岳人たちのあこがれとなる。尾根の一歩一歩に至福の思いと山に癒しの精気を貰いながらありがとう、ありがとうと歩いた。

ロマンチストをはっと現実に引き戻したのは、置き去りにされたカップラーメンの器、散らかった総菜のトレイ、ナイロン袋にごっそり詰められたゴミ。猿ヶ浄土を横目に見ながら現代文明は何処へ向かうのであろうか、人間浄土への厳しさを思わずにはいられない。

ブナオ山に同行氏の山岳会関係者が多数迎えに来ている姿が見えてきた。彼は遭難騒ぎの下界に帰る気持ちはたまらないと云っていた。一方、私の方も春先の白山や山系の見事な情景に接しながら、佳い作品を撮れなかったもどかしさを引きずっていた。さようなら笈ヶ岳。一里野までの下山では、私も疲れがたまって来て階段は一足で降りられない程の体力に落ちていた。

1996年6月記

＜石川県白山自然保護センター＞

中宮展示館展示室のリニューアル

昭和48年に白山自然保護センターが中宮温泉近くに開設されると同時に中宮展示館も併せて開設されました。昭和58年に吉野谷村木滑に白山自然保護センター本庁舎が開設され、通常の業務は本庁舎で行われるようになりましたが、中宮展示館は、本庁舎移転後も白山地域の自然やそこに暮らしてきた人々の生活について紹介する普及活動の中心的施設となっていました。

開設から20年、年間約4万人、約80万人の来館者がありました。展示施設が老朽化してきたため、大がかりな改修を行うこととなり、平成2年度より準備をすすめ、平成6年8月にリニューアルオープンしました。改修した展示室のテーマとしては、その重要さと保護の必要性が大きくなってきたブナ林をとりあげ、展示室内に四季のブナ林を再現したコーナーやブナ林を疑似体験できる「森の体験」コーナーなどを設けました。しかし、このブナ林展示室は約1年半、わずか75,000人の来館者を迎えたのみで閉鎖されることになります。

中宮展示館を襲った雪崩

リニューアルオープンから約1年半、平成8年2月1日、中宮展示館裏の斜面で発生した雪崩が展示館を襲いました。乾雪表層雪崩と呼ばれる雪崩は、展示館裏にあったオニグルミやミズナラの樹木を根ごと雪崩に巻き込み、中宮展示館に押し寄せました。雪崩は、崩れ落ちる雪と空気、そして大きな樹木を含み、その破壊力はすさまじいものがありました。展示館の約40cm角のコンクリート製の柱は完全に折れてしまったもの1本、それ以外にヒビの入ったものが数本。厚さ約15cmの壁も雪崩が直撃した壁は完全になくなっていました。中宮展示館を襲った雪崩は直撃を受けたブナ林展示室以外にも、その風圧により館内のガラスが飛び散ったり、正面玄関の木製の扉が吹き飛ぶなどの被害をもたらしました。この雪崩や被害についての詳しいことは以前の「はくさん」で紹介しています（「はくさん」第24巻第3号 1996、白山自然保護センター中宮展示館雪崩災害）。当然ブナ林展示室内にあった展示物もそのほとんどが破壊されてしまいました。

折れてしまったコンクリート製の柱

雪崩によって破壊された展示室内部

展示室の建築設計にあたって

平成8年6月、建物の安全性の検査で残った建物に問題がなかったことで、被害の少なかったレクチャールーム、白山の自然コーナー、フリースペースなどを復旧させ、なんとか仮オープンをすることが出来ました。しかし、ブナ林展示室の方の被害は大きく、建物の復旧は不可能な状態でした。このような中、地元の方々からの要望もあり、同じ場所での展示室の立て替え工事を行うことになったのです。

しかし、一度大きな雪崩がおきると、雪崩をくい止めることが出来る大きな樹木がなくなり、同じ場所で雪崩が発生する可能性は高くなります。同じ場所に同じように建物を建てては、また雪崩が襲うことは容易に想像できました。そこで、どのように建物を建てればよいか、専門家の意見も取り入れ、雪崩対策を行った設計を行いました。

建物自体を、これまでよりも山側にして、建物の壁を崖にほとんど接するようにし、屋根と崖の高さがそろうようにしました。また、建物自体の規模はほとんど同じなのですが、建物の横幅をこれまでより狭くし、雪崩が直撃し、壁が破壊されたところの手前までにしました。万が一、同じ場所で雪崩が発生し、中宮展示館を襲うことがあったとしても、その被害をくい止めることが出来るよう配慮したのです。

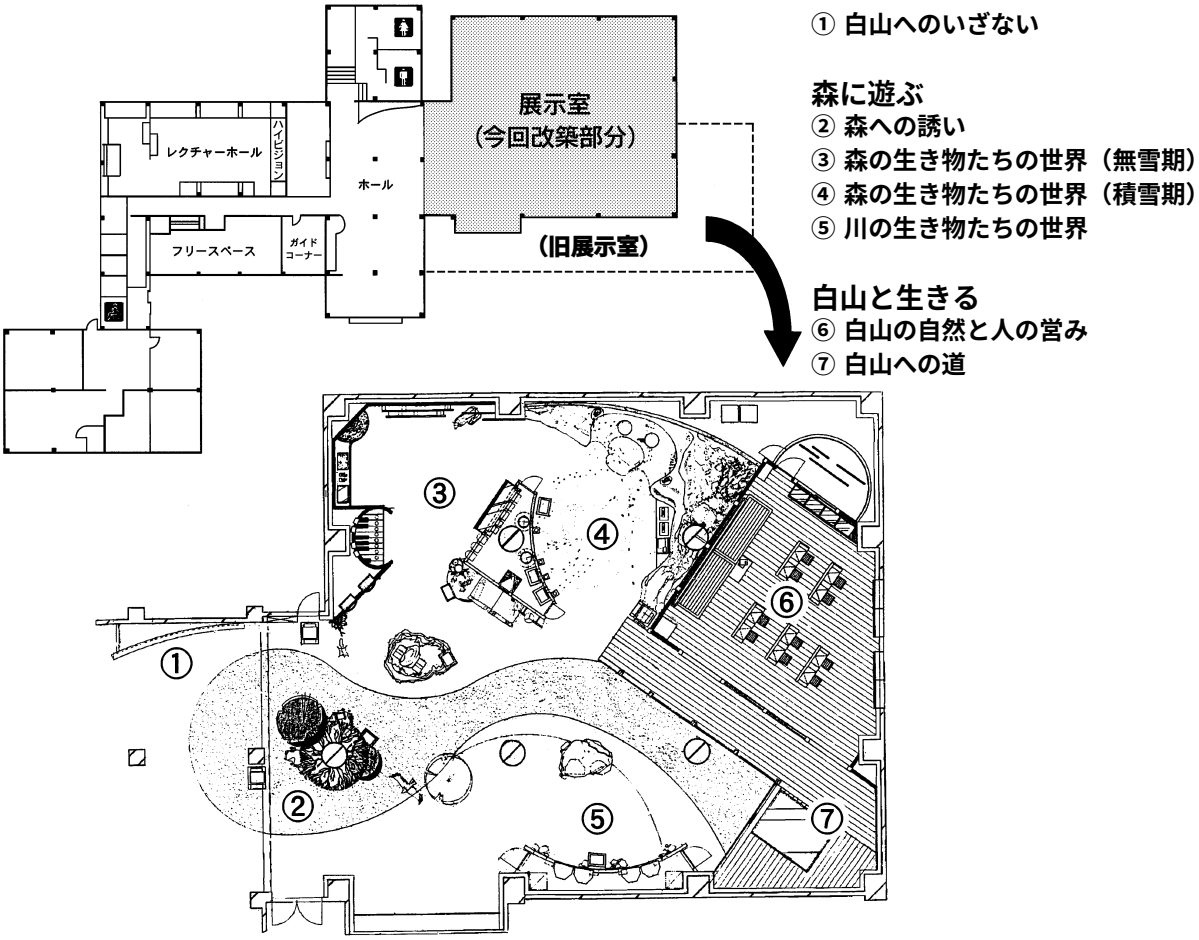
また、これまでの展示館は暗く、狭い感じがあり、観光バスで展示館を訪れた観光客は、トイレを利用するだけで、展示をほとんど見ない方も多数いらっしゃいました。これは、ホールと展示室が区切られていて、奥に何があるか分かりづらかったのが一つの要因だと思われました。今回の改修では、ホールと展示室が一体で明るく、ゆったりとすごせると同時に奥まで見渡すことが出来るよう、ホールと展示室入口にかけて広い空間と自然光を取り入れるようにしています。

展示内容の再検討

展示室の立て替えと形状の変更にあわせ、展示内容についても再検討しました。これまでのジオラマや模型による再現型による白山の自然の紹介から、来館者自身が実際にふれ、体験することが出来る参加体験型の展示を多く取り入れようと考えました。

解説パネルも一工夫し、観察者がフィールドノートに書き込んだような文字やイラストで構成しました。また、文字や写真、イラストなど解説パネルでの紹介が難しい内容は、音声や映像によって、より分かりやすく解説、紹介しています。

展示室は大きく2つのコーナーからなります。一つは「森に遊ぶ」。自然との出会いを体験し、白山のブナ林を疑似体験することから、森の営みや自然の不思議さ、おもしろさを探求する楽しさを味わってもらうコーナーです。そして、もう一つは「白山と生きる」。このコーナーでは、白山の山麓の人達の暮らしぶりや自然との関わり合い方、工夫について紹介し、人間と自然との関係について考えてもらうコーナーです。



このほかに、情報コーナーを設け、来館者が詳しく知りたい項目について、簡単に知ることが出来るような情報検索システムをつくりあげました。解説内容は約200項目、白山の自然や人文について、これまで白山自然保護センターが行ってきた様々な研究成果を取り入れた最新の内容も分かりやすく解説してあります。

中宮展示館のホール正面は「白山へのいざない」として、小松市の木場潟から見た白山のパネルを設置しました。白山の雄大さを感じさせる緩やかにのびたすそ野。そして真っ白な雪。白山が水、農耕、航海の神として敬われてきたことが感じられる写真です。パネルには石川県金沢市出身の野鳥研究家で詩人や随筆家でもある中西悟堂（なかにしごどう）氏の「白山の美林に讃す」という詩をのせてあります。中西氏は「日本野鳥の会」の創設者で初代会長として有名です。この詩は白山が国定公園から国立公園へと昇格したのを記念して詠まれたものです。

「白山へのいざない」

「森に遊ぶ」

森に遊ぶ

展示室に入った来館者は、まず大きなブナの木を目にすることになります。このコーナーは「森に遊ぶ」として、前回の改修で人気のあった「森の体験」コーナーの内容を、より充実させたコーナーです。このブナの大木は、このコーナーの象徴です。ここでは来館者が実際に手をふれ、動かすことによって白山のブナ林を体験し、様々な情報を引き出すことが出来ます。体験を通して白山のブナ林について理解すると共に、実際の森へ出ていって、本当の自然体験をするための動機づけとなるように構成しました。

大きく2つにわけ、一つはブナ林、そしてもう一つは川。ブナ林は更に夏と冬に分かれています。ブナ林の夏のコーナーではブナ林にすむ鳥類や昆虫、樹木について解説パネルや剥製、バードカービングなどの模型を使ったほか、音声や映像などで解説してあります。ブナ林の冬のコーナーでは、雪崩の様子を再現し、雪崩で流されてきたオニグルミも展示しました。また、雪の下で春を待つ動植物、雪の上に残された足跡やフンについても展示、解説しました。

川のコーナーでは清流を代表するイワナ、きれいな声でなくカジカガエルなど川の生き物について解説パネルや映像、立体映像などで紹介しました。

白山と生きる

中宮温泉夏期分校

展示室の奥には校舎風の建物が見えます。中宮展示館のある場所は、かつて中宮温泉や出作りに来ていた人たちの子供たちが通う中宮小中学校の分校「中宮温泉夏期分校」があったところです。普通、分校というと冬、積雪などのため学校に通うことが出来ない子供たちのため開設されますが、ここでは夏のみの分校として開設されていました。その分校の教室をイメージしてつくられたのがこのコーナーです。

このコーナーでは、白山の豊かなブナ林をその生活の場としてきた人々の暮らしについて紹介しています。白山麓の人々は、出作り、焼畑といった今よりも自然と密接に結びついた暮らしをしてきました。そのような先人たちの自然を利用しながらも自然と共に生きてきた生活の知恵、工夫などをパネルやスライド映像で紹介しました。

校舎の中には、木製のオルガンや椅子、机が並べてあります。机を開けると野生植物を採集、加工してつくった食品の模型を見たり、白山に伝わる伝説や民話を詠むことが出来ます。壁には解説パネルのほかに、自然の樹木やわらでつくった生活用具を展示してあります。

「白山と生きる」

窓の外をのぞいてみると、当時の分校の先生が、かつての中宮温泉の様子や炭焼きについて紹介するスライド映像が始まります。

また、白山は古くから信仰の山として知られ、加賀、美濃、越前からそれぞれ禅定道と呼ばれる修験の道が麓から山頂へのびていました。北部白山からは、白山比咩神社から現在の一里野を通り、山頂へ向かう加賀禅定道がありました。当時の様子を示す絵図が残されており、その複製を展示しました。その他、現在の白山の登山道などについても地形模型や解説パネルで示しています。

レクチャーホール、白山の自然コーナー

ここでは、白山のニホンザル、鳥類、昆虫、高山植物、化石や火山について標本や模型を使って分かりやすく展示しました。ハイビジョンコーナーではハイビジョンならではの美しい映像を上映します。これまでのオリジナル番組「ブナ林の四季－白山の自然－」に加え、石川・岐阜両県が協同で企画・製作をすすめてきた新たなハイビジョン番組「白山の四季」「夏に輝く小さな命～白山の高山植物～」を上映する予定です。

展示館周辺には「蛇谷自然観察園」や「川の生態観察園」もあり、四季折々の自然を楽しむことが出来ます。歩きやすい靴で、ゆっくり自然を楽しんで下さい。

展示館周辺は白山国立公園内でもあり、動植物の採集は出来ません。また、ゴミ箱も用意していません。ゴミは必ず持ち帰って下さい。

利用のご案内

開　館　日：5月1日～11月上旬（冬期閉館）
（積雪等によってかわります）
開館期間中は無休
新展示室は5月中にオープンの予定

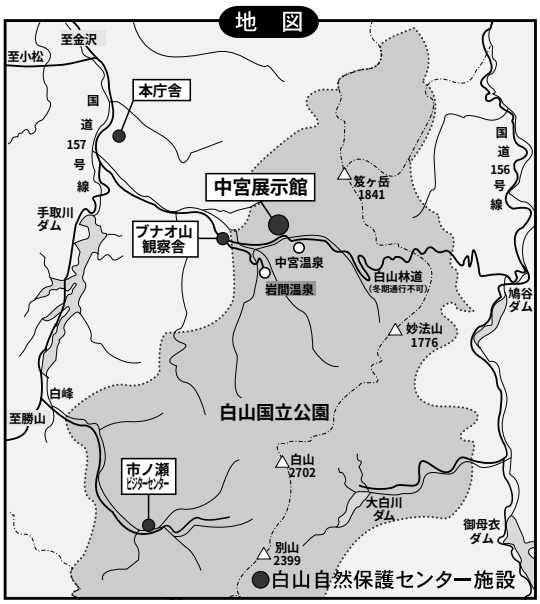
開 館 時 間：午前9時～午後4時30分

入　館　料：無　料

交通のご案内

バ　　ス：北陸鉄道石川総線鶴来駅から中宮温泉行き白山自然保護センター中宮展示館前下車

自　動　車：金沢から約1時間30分、小松から約1時間白山スーパー林道を利用して岐阜県白川村から約1時間



施設だより　ブナオ山観察舎

殊才　実

2月は雪の降る日が続き動物たちにとっては厳しい月でした。カモシカの親子は雪が深いのであまり行動せず、林の中で枝先などを採食しながら晴れるのを待っていました。サルの群れも樹木の上で冬芽や木の皮を採食しながら晴れるのを待っていました。しかし、ちょっとした晴れ間にはイヌワシやクマタカなども観察できました。特に2月はキツネをよく観察できました。キツネは河原で雪崩に巻き込まれて死んだニホンカモシカ（写真 左）を食べにくることもあります。

雪崩で死んだカモシカ（左）を食べにきたキツネ（右）

雪の日でも毎週のようにブナオ山観察舎を訪れる熱心な夫婦から感想文が寄せられたので紹介します。

「すなおな自分に出合えるちょっとした感動」

街で休日を楽しむ日々もいいけれど、時にはにぎやかな街をはなれ静かな山の中で自然を見つけに行くのも私のストレス解消法のひとつです。観察舎の中はとても寒いけど、暖かいスタッフの方たちが歓迎してくれます。自然と向き合える冬だけのブナオ山観察舎。動物たちのオアシスがここの山にはあります。

でっかい山の中、何が見えるのかなとじっと眼を一点に絞って隈なくさがすと、そこには野生のサルの家族やカモシカたちの親子、昼寝をしているキツネ、いろいろな野鳥たち。雪の上に残された動物たちの足あとを探してみるのも楽しみの一つです。

ブナオ山は大自然を通して生き生きとした生命あふれた姿が見られ、せいいっぱい生きることを、そしてまた明日がんばろう！ということを教えてくれる山です。ここに来るとすなおな自分に出合えた気がします。

あっという間に閉館の時間になってしまい、すっかり冷えきった体には一里野の温泉に入って帰るのも楽しみの一つです。

さて、今日も風呂おけ持って出かけるとしようか…　　Ｓ．Ｋ

Ｋ氏夫妻は自然と温泉をこよなく愛し、5月～10月には中宮展示館を訪れ、11月～4月にはブナオ山観察舎を訪れ熱心にサルやカモシカなどを観察しています。雪の降っている日やガスでなんにも観察できなくてもここに来れば心が和むといいます。

ブナオ山観察舎は、5月5日まで開館しています。皆さんも自然にふれ、ゆったりとした時間をすごしてみませんか。

4月、ブナオ山観察舎では、今シーズン募集していた冬のブナオ山観察舎とその周辺の自然を題材にした写真と絵画の展示を行います。応募して下さった方々の力作をご覧になって下さい。

センターの動き（1月21日～3月21日）

1.25　高山生態系の脆弱性評価と指標性の検討研究会議（つくば市）
1.26　獣害対策研究会（滋賀）
1.30　ブナオ山観察舎自然観察会（ブナオ山観察舎）
2.18　カモシカ特別調査第4回管理指導委員会（富山）
2.19　環境教育ミーティング中部準備会　（金沢）
2.23　自然系調査研究機関連絡会議（山梨）
2.23　「いしかわ自然学校」推進ワーキング会議（金沢）
2.27　かんじきハイキング　（ブナオ山観察舎）
2.28　手取川上流域崩壊機構解析検討委員会（金沢）
3. 7～8 山のトイレ事例発表大会（東京）
3.21　白山自然ガイドシステム検討会　（本庁舎）

編集後記

今年も暖冬で雪が少ないという予報が出されていました。実際、1月下旬までは、これまでにないほど雪が少なく、このまま春を迎えてしまうのではと思われました。しかし、2月に入ると、雪の日が多くなり、それまでの分をとりかえすかのような大雪の日もありました。このような大雪の中、白山の動物たちはどのように暮らしているのでしょうか？待ち望んでいる春はもうすぐです。

春になれば、今号でご紹介した中宮展示館をはじめ、白峰村市ノ瀬の市ノ瀬ビジターセンター、白峰村風嵐の白山国立公園センターがオープンします。これらの施設では白山を訪れる方たちに、白山の自然にふれ、楽しんでもらえるように各種パネルやハイビジョン映像、情報検索ソフトなどで情報を提供していきます。また、石川県は平成12年度から、いしかわ自然学校を実施していく予定です。本格的な実施は平成13年度からですが、様々な行事が白山周辺を含め、県内各地で繰り広げられていく予定です。中宮展示館、市ノ瀬ビジターセンター、白山国立公園センターなどの施設は、白山でのいしかわ自然学校の拠点となっていきます。多くの方がこのいしかわ自然学校に参加され、石川県の自然の素晴らしさにふれ、その保護の大切さに気付いていただければと思います。

石川県と岐阜県は平成10、11年度に共同でハイビジョンソフトとCD-ROMの製作をすすめてきましたが、まもなく完成します。CD-ROMは「白山登山ガイド」として、主に石川県側の砂防新道、岐阜県側の平瀬道、山頂お池めぐりコースを音声と映像によって紹介しています。また、ハイビジョンソフトについては、「白山の四季」と「夏に輝く小さな命～白山の高山植物～」の2本で、白山のブナ林、そこに生きるニホンカモシカやイヌワシなどの動物たち、白山山頂からの御来光やたくさんの高山植物などをハイビジョンならではの美しい映像で楽しむことが出来ます。これらのソフトは石川県では、中宮展示館、市ノ瀬ビジターセンター、白山国立公園センターで、岐阜県ではエコミュージアム関ヶ原などで上映の予定です。ぜひご覧になって下さい。

（野上）

目　次

表紙　川上御前社 ……小川　弘司 …1
金沢市にも現れたニホンザルの群れ ……上馬　康生 …2
笈ヶ岳紀行 ……田中　稔 …7
中宮展示館展示室のリニューアル ……10
施設だより　（ブナオ山観察舎）……殊才　実…15

はくさん　第27巻　第4号（通巻114号）

発行日　2000年3月21日（年4回発行）
編集発行　石川県白山自然保護センター
920-2326　石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ4
TEL07619-5-5321　FAX07619-5-5323
URL http://www.pref.ishikawa.jp/recr/hakusan/haku.html
E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
印刷所　株式会社　橋本確文堂

（本誌は再生紙を使用しています）